二少女

国木田独歩

上

夏の初、月色街(ちまた)に満つる夜の十時ごろ、カラコロと鼻緒のゆるそうな吾妻下駄(あずまげた)の音高く、芝琴平社(しばこんぴらしゃ)の後のお濠ばたを十八ばかりの少女(むすめ)、赤坂(あかさか)の方から物案じそうに首をうなだれて来る。

薄闇い狭いぬけろじの車止(くるまどめ)の横木を俛(くぐ)って、彼方(むこう)へ出ると、琴平社の中門の通りである。道幅二間ばかりの寂しい町で、（産婆）と書いた軒燈(がす)が二階造の家の前に点(つい)ている計りで、暗夜(やみよ)なら真闇(まっくら)黒な筋である。それも月の十日と二十日は琴平の縁日で、中門を出入(ではいり)す

る人の多少(すこし)は通るが、実、平常(ふだん)、此町に用事のある者でなければ余り人の往来(ゆきき)しない所である。

少女(むすめ)はぬけろじを出るや、そっと左右を見た。月は中天に懸(かゝ)っていて、南から北へと通った此町を隈なく照らして、森(しん)としている。人の住んで居ない町かと思われる程で、少女が（産婆）の軒燈の前まで来た時、其二階で赤児(あかんぼ)の泣声が微かにした。少女は頭を上げてちょっと見上げたが、其儘すぐ一軒置(おい)た隣家(となり)の二階に目を注いだ。

　隣家の二階というのは、見た処、極く軒の低い家で、下の屋根と上の屋根との間に、一間の中窓(ちゅうまど)が窮屈そ

うに挾まっている、其窓先に軒がさも鬱陶しく垂れて、陰気な影を窓の障子に映じている。

少女は此二階家の前に来ると暫時く佇止って居たが、窓を見上げて「江藤さん」と小声で呼んだ、窓は少し開いていて、薄赤い光が煤に黄んだ障子に映じている。

「江藤さん、」と返事が無いから、少女は今一度、やはり小声で呼んだ。

障子がすっと開いたかと思うと、年若い姿が腰から上を現わして、

「誰た？」

「私。」

「オヤ、田川（たがわ）さん。」

「少し用事が有（あっ）て来たのよ、最早（もう）お寝（やすみ）？」

「オヤそう、お上がんなさいよ、でも未だ十時が打たないでしょう。」

「晩（おそ）く来てお気の毒様ねエ」と少女は少しもじもじして居る。

二階の女の姿が消えると間もなく、下の雨戸を開ける音がゴトゴトして、建付（たてつけ）の曲（ゆが）んだ戸が漸（やっ）と開いた。

「オヤ好い月だね、田川さんお上がんなさいよ」という女は今年十九、歳には少し老けて見ゆる方なるがすらりとした姿の、気高い顔つき、髪は束髪に結んで身

には洗曝（あらいざらし）の浴衣を着けて居る。

「ちょっと平岡（ひらおか）さんに頼まれて来た用があるのよ、此処でも話せますよ、もう遅いもの、上ると長座（ながく）なるから。……」と今来た少女は言って、笑を含（ふく）んでいる。

それで相手（あいて）の顔は見ないで、月を仰（あお）いだ目元は其丸顔に適好（ふさわ）しく、品の好い愛嬌のある小軀（こがら）の女である。

「用というのは大概解って居ますが、色々話もあるから一寸お上んなさいよ。」

「そう、あの局の帰りに来ると宜（いゝ）んだけど、家に急ぐ用が有ったもんだから……」

といい乍ら二人は中に入（はい）った。

入ると直ぐ下駄直しの仕事場で、脇の方に狭い階段（はしごだん）が付ていて、仕事場と奥とは障子で仕切（きっ）てある。其障子が一枚開（あ）かっていたが薄闇くって能く内が見えない。

「遅く来（あが）って御気毒様、」と来た少女は軽（かろ）く言った、奥に向（むかっ）て。

「どう致しまして、」と奥で嗄（しわがれ）た声がして、続（つゞい）て咳嗽（せき）がして、火鉢の縁をたたく煙管（きせる）の音が重く響いた。

「この乱暮さを御覧なさい、座る所もないのよ。」と主人（あるじ）の少女はみしみしと音のする、急な階段を先に立（たっ）て陞（のぼ）って、

「何卒(どう)ぞ此処へでも御座(おす)わんなさいな。」

と其処らの物を片付けにかかる。

「すこし頼まれた仕事を急いでいますからね、……源(げん)ちゃん、お床を少し寄せますよ。」

「いいのよ、其様(そう)してお置きなさいよ、源ちゃん最早(もう)お寝み、」と客の少女は床なる九歳(ここのつ)ばかりの少年を見て座わり乍ら言って、其のにこやかな顔に笑味を湛えた。

「姉さん、氷！」と少年は額を少し挙げて泣声で言った。

「お前、そう氷を食べて好いかね。二三日前から熱が

出て困って居るんですよ。源ちゃんそら氷。」
主人の少女は小さな箱から氷の片(かけ)を二ツ三ツ、皿に乗せて出して、少年の枕頭(まくらもと)に置(おい)て、「もう此限(これぎり)ですよ、また明日(あした)買ってあげましょうねエ」
「風邪でもおひきなさったの！」と客なる少女は心配そうに言った。
「もう快々(いゝ)んですよ。熱いこと、少し開けましょねエ」と主人の少女は窓の障子を一枚開け放した。今まで蒸熱かった此一室(ひとま)へ冷たい夜風(よかぜ)が、音もなく吹き込むと
「夜風に当ると悪いでしょうよ、私(わたし)は宜いからお閉めなさいよ、」と客なる少女、少年の病気を気にする。

「何に、少しは風を通さないと善くないのよ。御用というのは欠勤届のことでしょう、」と主人の少女は額から頬へ垂れかかる髪（け）をうるさそうに撫であげながら少し体躯（からだ）を前に屈（かが）めて小声で言った。

「ハア、あの五週間の欠勤届の期限が最早きれたから何とか為さらないと善（い）けないッて、平岡さんが、是非今日私に貴姉（あなた）のことを聞いて呉れろッて、……明朝（あした）は私が午前出だもんだから……」

「成程そうですねエ、真実（ほんと）に私は困まッちまッたねエ、五週間！　もう其様（そんな）になったろうか、」と主人の少女は嘆息（ためいき）をして、「それで平岡さんが何とか言って？」

「イイエ別に何ともお仰(つしや)らないけエど、江藤さんは最早(もう)局を止すのだろうかって。貴姉どうなさるの。」

「ソー、夫れで実は私も迷っているのよ」と主人の少女は嘆息をついた。

客の少女は密(そつ)と室内を見廻した。そして何か思い当ることでも有るらしく今まで少し心配そうな顔が急に爽々(さえぐ)して満面の笑味(えみ)を隠し得なかったか、ちょッとあらたまって、

「実は少々貴姉に聞(きい)て見ることがあるのよ、」

と一段小声で言った。

「何に？」と主人の少女も笑いながら小声で言った。

これも何か思い当る処あるらしく、客なる少女の顔をじっと見て、又た密と傍の寝床を見ると、少年は両腕を捲り出したまま能く眠っている、其手を静に臥被の内に入れてやった。

「怒ちゃ善けないことよ」と客の少女はきまり悪るそうに笑って言出し兼ねている。

「凡そ知ッているのよ、言て御覧なさい、怒りも何もしないから。お可笑な位よ、」と言う主人の少女の顔は羞恥そうな笑のうちにも何となく不穏のところが見透かされた。

「私の口から言い悪くいけれど……貴姉大概解かって

いましょう……」

「私が妾になるとか成ったとかいう事なんでしょう。」

と言った主人の少女の声は震えて居た。

下

此二人の少女は共に 東京電話交換局（とうきょうでんわこうかんきょく）［＃ルビの「とうきょう」は底本では「とうきやう」］の交換手であって、主人の少女は江藤（えとう）お秀（ひで）という、客の少女は田川（たがわ）［＃ルビの「たがわ」は底本では「たがは」］お富（とみ）といい、交換手としては両人（ふたり）とも老練の方であるがお秀は局を勤める

ようになった以来、未だ二年許りであるから給料は漸と十五銭であった。

　お秀の父は東京府（とうきょうふ）に勤めて三十五円ばかり取って居て夫婦の間にお秀を長女（かしら）としてお梅源三郎（うめげんざぶろう）の三人の児を持（もっ）て、左まで不自由なく暮らしていた。夫れでお秀も高等小学校を卒えることが出来、其後は宅（うち）に居て針仕事の稽古のみに力を尽す傍（かたわら）、読書をも勉めていたが恰度三年前、母が病（やみ）ついて三月目に亡くなって、夫れを嘆く間もなく又た父が病床（とこ）に就くように成りこれも二月ばかりで母の後を逐い、三人の児は半歳のうちに両親（ふたおや）を失って忽ち孤児（みなしご）となった。そうして殆（ほとん）ど丸

裸体の様で此世に残された。

　そこで一人の祖母は懇意な家で引うけることになり、お秀は幸い交換局の交換手を募（つのっ）て居たから直ぐ局に勉（つと）めるようになって、妹と弟は兎も角お秀と一所に暮していた。それも多少（すこし）は祖母を引うけた家から扶助（みつい）でもらって僅かに糊口（くらし）を立てていたので、お秀の給料と針仕事とでは三人の口はとても過活（すぐ）されなかった。しかしお秀の労働（ほねおり）は決して世の常の少女の出来る業ではなかった。あちら此方と安値（やす）そうな間を借りては其処から局に通って、午前出の時は午後を針仕事に、午後出の時は午前を針仕事に、少しも安息（やす）む暇がないうち

にも弟を小学校に出し妹に自分で裁縫の稽古をしてやり、夜は弟の復習（さらえ）も験（み）てやらねばならず、炊事（にたき）から洗濯から皆な自分一人の手でやっていた。

其うち物価（もの）は次第（だん〴）高くなり、お秀三人の暮（くらし）は益々困難に成って来た。如何（どう）するだろうと内々（ない〱）局の朋輩も噂していた程であったが、お秀は顔にも出さず、何時も身の周囲（まわり）小清潔（こざっぱり）として左まで見悪い（みにく）衣装（なり）もせず、平気で局に通っていたから、奇怪（おかし）なことのように朋輩は思って中には今の世間に能くある例を引（ひい）て善くない噂を立てる連中もあった。

すると一月半ばかり前からお秀は全然（ぱったり）局に出なく

なった。初は一週間の病気届、これは正規で別に診断書が要(い)らない、其次は診断書が付(つい)て五週間の欠勤。其内五週間も経(たっ)た、お秀は出て来ないのみならず、欠勤届すら出さない。いよいよ江藤さんは妾になったという噂が誰の口からともなく起って、朋輩の者皆んな喧噪(やかまし)く騒ぎ立てた、遂に係の技手の耳に入(はい)った。そこで技手の平岡(ひらおか)［#ルビの「ひらおか」は底本では「ひらをか」］は田川お富に頼んで、お秀の現状(ありさま)を見届けた上、局を退(ひ)くとも退かぬとも何とか決めて呉れろと伝言(つたえ)さしたのである。お富は朋輩の中でもお秀とは能く気の合(あっ)て親密(した)しい方であるからで。

しかしお秀が局を欠勤（やすん）［＃ルビの「やすん」は底本では「やす」］でから後も二三度会って多少事情（わけ）を知って居る故、かの怪しい噂は信じなかったが、此頃になって、或（もしや）という疑が起らなくもなかった。というのもお秀の祖母という人が余り心得の善い人でないことを兼ねて知っているからで。

お富はお秀の様子を一目見て、もう殆ど怪しい疑惑（うたがい）は晴れたが、更らに其室のうちの有様を見てすっかり解かった。

お秀の如何に困って居るかは室のうちの様子で能く解る。兼ねて此部屋には戸棚というものが無いからお

秀は其衣類を柳行李二個(ふたつ)に納めて室(へや)の片隅に置(おい)ていたのが今は一個(ひとつ)も見えない、そして身には浴衣の洗曝を着たままで、別に着更えもない様な様である。六畳の座敷の一畳は階子段に取られて居るから実は五畳敷の一室に、戸棚がない位だから、床もなければ小さな棚一つもない。

天井は低く畳は黒く、窓は西に一間の中窓がある計り東のは真実(ほんと)の呼吸(いき)ぬかしという丈けで、室のうち何処となく陰鬱で不潔で、とても人の住むべき処でない。

簿記函と書(かい)た長方形の箱が鼠入らずの代をしている、其上に二合入の醤油徳利(しょうゆどくり)と石油の罐とが置(おい)てあって、

箱の前には小さな塗膳があって其上に茶椀小皿などが三ツ四ツ伏せて有る其横に煤（くす）ぼった涼炉（しちりん）が有って凸凹（でこぼこ）した湯鑵（やかん）がかけてある。涼炉と膳との蔭に土鍋が置いて有（あっ）て共に飯匕（しゃもじ）が添えて有るのを見れば其処らに飯桶（おはち）の見えぬのも道理である。

又た室の片隅に風呂敷包が有って其傍に源三郎の学校道具が置いてある。お秀の室の道具は実にこれ限（だけ）である。これだけがお秀の財産である。其外源三郎の臥て居る布団というのは見て居るのも気の毒なほどの物で、これに姉と弟とが寝るのである。この有様でもお秀は妾になったのだろうか、女の節操（みさお）を売（うっ）てまで金銭

が欲(ほし)い者が如何して如此(こん)な貧乏(まず)しい有様だろうか。

「江藤さん、私は決して其様(そん)なことは真実(ほんと)にしないのよ。しかし皆なが色々(いろん)なことを言っていますから或(もしや)と思ったの。怒っちゃ宜(いけ)ないことよ、」とお富の声も震えて左も気の毒そうに言った。

「否(いゝ)エ、怒るどころか、貴姉(あなた)宜く来て下すって真実(ほんと)に嬉れしう御座います、局の人が色々なことを言っているのは薄々知っていましたが、私は無理はないと思いますわ……」と、

さも悲しげにお秀は言って、ほっと嘆息を吐いた。

「何故(なぜ)。私は口惜(くやし)いことよ、よく解りもしないことを

左も見て来たように言いふらしてさ。」

「私だって口惜いと思わないことはないけエど、あんな人達が彼是れ言うのも尤ですよ、貴姉……祖母(おばあ)さんね…」

とお秀は口籠(くちごも)った、そしてじっとお富の顔を見た目は湿んでいた。

「祖母さんが何とか言ったのでしょう……真実(ほんと)に貴姉はお可哀そうだよ……」とお富の眼も涙含んだ。

「祖母さんのことだから他の人には言えないけれど……そら先達貴姉の来ていらしゃった時、祖母さんがあんな妙なことを言ったでしょう。処が十日ばかり前に

小石川(こいしがわ)から来て私に妾になれと言わないばかりなのよ、あのお前の思案(かんがえ)一つでお梅や源ちゃんにも衣服(きもの)が着せてやられて、甘味(おいしい)ものが食べさされるツて……」

「それで妾になれって？」お富は眼眶(まぶち)を袖で摩って丸い眼を大きくして言った。

「否(いゝ)エ妾になれって明白(はっきり)とは言わないけれど、妾々ッて世間で大変悪く言うが芸者なんかと比較(くらべ)ると幾何(いくら)いいか知れない、一人の男を旦那にするのだからって……まあ何という言葉でしょう……私は口惜くって堪りませんでしたの。矢張身を売るのは同じことだと言いますとね、祖母さんや同胞(きょうだい)のために身を売るのが何

が悪いツて……」
「まア其様なことを！」
「実、私も困り切ているに違いないけエど、いくら零落ても妾になぞ成る気はありませんよ私には。そんな浅間しいことが何で出来ましょうか。祖母さんに、どんな事が有ツても其様な真似は私はしない、私のやれる丈けやって妹と弟の行末を見届けるから心配して下さるなと言切って其時あんまり口惜かったから泣きましたのよ。それからね寧のこと針仕事の方が宜いかと思って暫時局を欠勤んでやって見たのですよ。しかし此頃に成って見ると矢張仕事ばかりじゃア、有る

時や無い時が有って結極（つまり）が左程の事もないようだし、それに家にばかりいるとツイ妹や弟の世話が余計焼きたくなって思わず其方（それ）に時間を取られるし……ですから矢張半日ずつ、局に出ることに仕ようかとも思って居たところなんですよ。」

「そしてお梅さんはどうなすって？」とお富は不審（ふしぎ）そうに尋ねた。

「ですから、今の処、とても私一人の腕で三人はやりきれない！　小石川の方へも左迄は請求（たのま）れないもんですから、お梅だけは奉公に出すことにして、丁度一昨々日（さきおととい）か先方（むこう）へ行きましたの。」

「まぁ何処へなの？」

「じき其処なの、日蔭町（ひかげちょう）の古着屋なの。」

「おさんどんですか。」

「ハア。」

「まぁ可哀そうに、やっと十五でしょう？」

「私も可哀そうでならなかったけエど、つまり私の傍に居た処が苦しいばかりだし、又た結局（つまり）あの人も暫時（しばらく）は辛（つら）い目に遇（あっ）て生育（そだ）つのですから今時分から他人の間に出るのも宜かろうと思って、心を鬼にして出してやりました、辛抱が出来ればいいがと思って、……それ源ちゃんは斯様（こんな）だし、今も彼の裁縫（しごと）しながら色々（いろん）なこ

とを思うと悲しくなって泣きたく成(なっ)て来たから、口のうちで唱歌を歌ってまぎらしたところなの。」

「そして貴姉、矢張局にお出(いで)なさいな。その方が宜いでしょうよ。それに局に出て多忙(いそがし)い間だけでも苦労を忘れますよ」とお富は真面目にすすめた。お秀は嘆息ついて、そして淋びしそうな笑を顔に浮かべ、

「ほんに左様(そう)ですよ、人様のお話の取次をして何番々々と言って居るうちに日が立ちますからねエ」と言って「おほほほほ」と軽く笑う。「女の仕事はどうせ其様(そん)なものですわ、」とお富も「おほほほほ」と笑ッた。そしてお秀は何とも云い難(にく)い、嬉しいような、哀れな

ような、頼もしいような心持がした。

兎も角も明後日（あさって）からお秀は局に出ることに話を極めてお富に約束したものの、忽ち衣類（きもの）の事に思い当って当惑した。若い女ばかり集まる処だからお秀の性質でもまさかに寝衣（ねまき）同様の衣服（きもの）は着てゆかれず、二三枚の単物は皆な質物（しち）と成っているし、これには殆ど当惑したお富は流石女同志だけ初めから気が付いていた。お秀の当惑の色を見て、

「気に障（さ）えちゃいけないことよ、あの……」

「何に、どうにか致しますよ」とお秀は少し顔を赤らめて、「おほほほほ」と笑った。

「だってお困りでしょう？　明日(あした)私が局から帰ったら母上(おっか)さんと相談して……四時頃又来ましょうよ。」

「あんまりお気の毒さまで……」

お秀は眼に涙一杯含ませて首を垂れた。お富は何とも言い難い、悲しいような、懐かしいような心持がした。

　夜が大分更けたようだからお富は暇を告げて立ちかけた時、鈴虫の鳴く音が突然室(へや)のうちでした。

「オヤ鈴虫が」とお富は言って見廻わした。

「窓のところに。お梅さんが先達(せんだっ)て琴平(こんぴら)で買って来たのよ、奉公に出る時持(もっ)てゆきたいって……。」

「まだ小供ですもの、ねえ」とお富は立（たっ）て二人は暗い階段（はしごだん）を危なそうに下（お）り、お秀も一所に戸外（そと）へ出た。

月は稍や西に傾いた。夜は森（しん）と更けて居（い）る。

「そこまで送りましょう。」

「宜いのよ、其処へ出ると未だ人通りが沢山あるから」

とお富は笑って、

「左様なら、源ちゃんお大事に、」と去（ゆ）きかける。

「御壕の処まで送りましょうよ、」とお秀は関（かま）わず同伴（いっしょ）に来る。二人の少女（むすめ）の影は、薄暗いぬけろじの中に消えた。

ぬけろじの中程が恰度、麺包屋（ぱんや）の裏になっていて、

今二人が通りかけると、戸が少し開て居て、内で麺包を製造っている処が能く見える。其焼たての香しい香が戸外までぷんぷんする。其焼く手際が見ていて面白いほどの上手である。二人は一寸と立てみていた、

「お美味そうねエ」とお富は笑って言った。

「明朝のを今製造えるのでしょうねエ」とお秀も笑うて行こうとする、

「ちょっと御待ちなさいよ」とお富は止めて、戸外から、

「その麺包を少し下さいな。」

三十計りの男と十五位な娘とが頻に焼ていたが、

驚（おどろい）て戸外（そと）の方を向いた。

「お幾価（いくら）？」

娘は不精無精に立った。

「お気の毒さま、これ丈け下さいな、」とお富は白銅一個（ひとつ）を娘に渡すと、娘は麵包を古新聞に包んで戸の間から出した。

「源ちゃんにあげて下さいな、今夜焼きたてが食べさせたいことねエ、そら熱いですよ。」とお秀に渡す。

「まあお気の毒さまねエ、明朝（あす）のお目覚（めざ）にやりましょう。」

二人はお壕辺（ばた）の広い通りに出た。夜が更けてもまだ

十二時前であるから彼方此方、人のゆききがある。月はさやかに照て、お壕の水の上は霞んでいる。

「左様なら、又た明日。お寝みなさい、源ちゃん御大事に。」お富はしとやかに辞儀して去こうとした。

「どうも色々有難う御座いました。お母上にも宜しく……それでは明日。」

二人は分れんとして暫時、立止った。

「あア、明日お出になる時、お花を少し持て来て下さいませんか、何んでも宜いの。仏様にあげたいから」

とお秀は云い悪くそうに言った。

「此頃は江戸菊が大変よく咲ているのよ、江戸菊を持

て来ましょうねエ。」とお富は首をちょっと傾げてニコリと笑って。

「貴姉の処に鈴虫が居て？」

「否エ、どうして？」

「梅ちゃんの鈴虫が此頃大変鳴かないようになって、何だか死にそうですから、どうしたら宜いかと思って。」

「そう、胡瓜をやって？」

「ハア、それで死にそうなのよ」

と言ってる処へ、巡査が通り掛って二人の様子を怪しそうに見て去った。二人は驚いて、

「左様なら……」

「左様なら……急いでお帰んなさいよ……。」

お富はカラコロカラコロと赤坂の方へ帰ってゆく、

お秀はじっと其後影を見送(みおくっ)て立(たっ)て居た。(完)

(発表年月不詳「濤声」より)

底本：「日本プロレタリア文学大系　序」三一書房
　　１９５５（昭和30）年３月31日第１版発行
　　１９６１（昭和36）年６月20日第２刷発行
※底本に見る旧仮名の新仮名への直し漏れは、あらためた上で注記した。
入力：Nana ohbe
校正：林　幸雄
２００１年12月27日公開
２００４年７月８日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。